

「底が突き抜けた」時代の歩き方⁴⁴⁷

北オセチア学校占拠事件はどうして起こったのか

ギリシャで開催されていた04年夏のオリンピックが閉会した直後の9月1日、チェチェン共和国に隣接する北オセチア共和国のベスランで、学校占拠事件が発生した。現場は小学校、中学校、高校を合わせたような学校で、約900人の生徒が在籍していた。当日は始業式であったので、教職員など学校関係者以外に保護者や地元の名士なども招かれていたこともあって、1270人が学校を占拠した武装勢力の人質となった。一時は乳幼児を含む人質26人が解放され、無事解決への期待も高まったが、三日目に偶発的な爆発をきっかけに激しい銃撃戦が始まり、最悪の結末を迎えた。三日間のにらみ合いの末にロシアの特殊部隊が学校に突入し、人質を救出したが、323人の死者、704人の負傷者を出した。死者の半数以上が子供で、32人の武装集団の大半が死亡した。

体育館に押し込められていた人質は食事はもちろん、水を摂ることも許されず、なかには自分の尿を飲んでしのいでいた人質もいた。狭い体育館内は猛烈な暑さとなり、生き残った人質の大半は裸の状態だった。事件が起こったベスランは人口3万5千人ほどの町であり、1%近くの住人が亡くなったことになり、ロシア連邦保安局の11人の特殊部隊員も犠牲になった。以上は事件の概略であり、この事件に関する記事や文章をいくつか読んで、とりあえずわかったことを以下に列記してみる。

1、事件を起こした武装集団がチェチェンからのロシア連邦軍の撤退、イングーシ襲撃事件の際に拘束された仲間の釈放といった要求を出していたことから、事件を起こしたのはチェチェン独立派武装勢力とみられている。ところが、彼らは要求を実現させるための実際の交渉には熱心ではなかったために、今回の学校占拠テロの目的は、子供を含む人質に容赦なく銃弾を浴びせたことから、最大限の人的被害をもたらすことによって、ロシア南部のカフカス地方に根強く残るオセチア人、チェチェン人、イングーシ人の民族対立を再燃させて、ロシアを不安定化させることにあったのではないかと、という見方が浮上している。ソ連の解体を目の当たりにしてきたプーチン大統領が、ロシアの崩壊をなによりも恐れているだろうことを考えると、この見方に信憑性がないとはいえない。

2、今回の学校占拠事件は、8月下旬から立て続けにロシアで起こったテロと連続していると考えられる。8月24日夜にモスクワのバス停で爆弾が爆発し、その数時間後に二機の旅客機が自爆テロで墜落し、90人が死亡した。8月31日にはモスクワの地下鉄駅近くで自爆テロが発生して、10人が死亡した。そして、翌9月1日の北オセチア学校占拠事件である。8月24日の首都モスクワの同じ空港を離陸した二機の旅客機墜落事件では、黒い服のチェチェン女性二人が、それぞれ機内に爆弾を持ち込んだとされ

ている。現地の報道では、容疑者のものと思われる遺体は他の遺体よりも広範囲に散乱していたため、その人物が爆発物を身に着けていたか、爆破装置のすぐそばにいた可能性を示唆している。更に、遺族が名乗り出ていないのは、その二人の女性だけだった。

3 1日のモスクワの地下鉄駅付近の自爆テロも、警官らが怪しい女性に近づこうとしたときに爆発が起きたため、女性の犯行とみられている。

3、容疑者の女性たちは「黒い未亡人」、あるいは「黒衣の寡婦」と呼ばれる自爆テロ組織のメンバーとみなされ、いずれもロシアとの戦争で夫や家族を失ったチェチェン女性で、彼女たちはロシアに対する報復を誓ってモスクワ市内などに潜入しているという。この一連の事件で、プーチン政権のテロ対策能力も失墜している。プーチンは4年前の大統領就任以来、チェチェンの独立派武装勢力の掃討作戦は、ほぼ完了したと勝利宣言を繰り返してきており、8月末の地下鉄爆破事件の後も、チェチェン問題が「正常化」しつつあることに対する武装勢力のあらわれだ、と首を傾げるような強弁を行ってきたからだ。しかし、学校占拠事件に至って、もはやそんな強弁は通用しなくなった。自爆テロの犠牲に脅えるロシア国民にとっての願いは、プーチンの奇妙な強弁よりも、現実的なテロ防止策にあったからだ。問題は自爆テロの続発ではなく、それを防げない無能なロシア政府にあるのではないか、という見方が広がっている。

4、今回の学校占拠事件によってロシアは初めて、国連安保理に対してテロへの非難声明を出すよう呼びかけ、一連の事件の「犯行声明」がイスラム系ウェブサイトに掲載されたのに飛びついたプーチン大統領は、「アルカイダと関係のあるテロ組織が今回のテロの犯行声明を出しているとするれば、チェチェンで活動している特定の勢力が国際的テロ組織とつながりがあることは確かだ」と述べた。しかし、「イスランプリ旅団」というイスラム組織が出した声明によれば、旅客機爆破の実行犯はそれぞれ5人であり、女性一人ずつの犯行の可能性を示す現場の証拠とは明らかに食い違っている。チェチェンの独立派とアルカイダをはじめとするロシア国外の国際的なイスラム系テロ組織との間に、直接のつながりがあるのかどうかは、まだ明確にはされていない。

5、にもかわらず、プーチン政権はとりわけ9・11以降、「あなたたちは、9・11テロの下手人はテロリストと呼ぶのに、なぜ、チェチェンのテロリストに対しては武装蜂起部隊と呼ぶのか」と、プーチンが欧州のジャーナリストに苛立ちをぶつけたように、チェチェン独立派に「テロリスト」のレッテルを張って一切の交渉を拒否し、武力によるチェチェン独立の封じ込めを図ると同時に、チェチェン独立派をアルカイダなどの過激なイスラム教徒による国際テロネットワークに強引に結びつけようとしている。学校占拠事件の後、プーチンは、「子供を平気で殺すような連中と対話をしなさい」という助言など聞きたくもない。オサマ・ビンラディンをブリュッセルやホワイトハウスに招いて、ぜひ、お話ししましょうなどとするか。なぜ、われわれが子供の虐殺者と話し合わなければならないのか」と、欧州のジャーナリストたちのインタビューに答えて、チェチェン問題を9・11テロと同次元にまで引き上げ、アメリカのブッシュ政権の支

持、あるいは暗黙の了解を得ようとしたのだ。

6、9・11以降、プッシュ政権がアメリカ国内の治安強化を図って大統領の強権支配を行ったように、ロシアのプーチン政権もテロ対策を名目に大統領の権限強化を図るために、大規模な政府機構改革案を9月13日、発表した。たとえば、政権に批判的な無所属議員の一掃を狙って、州知事の直接選挙から中央政府による事実上の任命制への変更、下院議員の選出方法をすべて比例代表制に改めるなど、更に、KGB（旧ソ連国家保安委員会）の後継機関・ロシア連邦保安局（FSB）の権限拡大、国民の国内移動の制限、政府の目や耳となる情報提供者の組織化など、旧ソ連型の中央集権体制の一部復活が目論まれている。皮肉なことに、「プーチンは民主主義を愚弄している」として、唯一抗議行動に立ち上がっているのは、旧ソ連時代に強権支配を行った共産党だという。

以上の諸点から浮かび上がってくるのは、「チェチェン問題」とはなにかであり、チェチェン人がどうしてロシアに抵抗し、ロシアがどうして強圧的にチェチェンの独立を撥ねつけるのか、という点である。作家の米原万里は『私の読書日記』（『週刊文春』04・9・16）で「世界から忘れ去られたチェチェンという地獄」と題して、要領よく「チェチェン問題」を解説してくれる。一連のテロ事件の《背景には、94年12月にロシア軍がチェチェンに侵攻して以来続く泥沼の戦争がある。黒海とカスピ海に挟まれたコーカサスの山岳地帯にある岩手県ほどの面積の人口70万～100万の小国に10万のロシア軍が駐留し続け、すでに20万人を超える市民を殺戮している。こちらの方はほとんど報道されない》と述べて、『チェチェンで何が起きているのか』（林克明、大富亮、高文研）を手に《歴史的経緯が手短かに紹介される。》

《18世紀に始まったロシア帝国による植民地化政策は、ソビエト政権によっても欺瞞的な『諸民族の友好』という表看板のもとに引き継がれ、第二次大戦の最中スターリンは対独協力の怖れがあるとの名目でチェチェン人を一夜にして根こそぎ中央アジアのカザフスタンに強制移住させた。この時にチェチェン人の半分ないし三分の二が落命している。ロシアに蹂躪じゅうりゅうされ続けた400年間にわたって誇り高いチェチェン人は果敢に抵抗を続けており、トルストイやデュマなどの文豪たちもその勇猛果敢と高潔を敬愛の念を込めて作品化している。

97年に国際機関の監視の下民生的に選出されたマスハーフ政権を蔑ろにして傀儡かいらい政権をでっち上げてまで未だにロシアがチェチェンに固執するのは、油田の存在とカスピ海からの石油パイプラインの通過点でもあることに加えて、帝国内の他の植民地離反の呼び水になることを恐れているせいではないか。

エリツィン政権による94～96年の第一次チェチェン戦争の失敗を、戦場報道による国民の支持離れと判断した、KGBあがりのプーチン大統領は、「テロリストよりもジャーナリストを殲滅せよ」と公言し、極端な報道管制と報道人弾圧を開始した。

国民の耳を封じた上で、凶悪なテロ事件 犯行声明の無いまま当局によるチェチェン人犯行説の断定 ロシア軍による大規模なチェチェン空爆&掃討作戦 恐ろしい人権蹂

躍にも「チェチェン人によるテロ」の直後のためロシア国内も国際社会からも非難の声が上がりにくい テロ事件は犯人未確定のまま収束する、という謀略じみた筋書きを反復しながらプーチン政権はチェチェン民族の絶滅を謀っているのではと思わせる事態が進行している。》

この紹介のうえに、軍事ジャーナリストの田岡俊治の説明（『アエラ』04・9・20）を付け加えてみる。

《帝政ロシアは18世紀末から、コーカサス山脈の北斜面のチェチェンを侵略してきた。1818年にグロズヌイに要塞を築いて征服の拠点とした。だが、1859年にイスラム指導者シャミーリが降伏するまで激しい抵抗が続いた。

第2次大戦中、ドイツ軍がコーカサスに入ると、チェチェン人の一部はドイツに協力したとされ、44年ドイツ軍が退去後、スターリンはチェチェン人を中央アジアへ強制移住させ、50万人のうち3分の1が亡くなったといわれる。

91年のソ連解体に乘じ、チェチェン人は独立を宣言した。だが、ソ連邦内の共和国とちがい、チェチェンはロシア本国内の「自治共和国」だったから、独立を許せばロシアの他の自治共和国も独立に向かう可能性がある。そのうえ、チェチェンはカスピ海と黒海を結ぶ交通の要衝で、パイプラインを建設する計画もあったからロシアは独立を認めなかった。

94年にロシア連邦防諜局（旧KGBの一部）がチェチェンの親露派を支援してクーデターを起こさせたが失敗。面目丸潰れとなったエリツィン政権は12月チェチェンに出兵した。

首都グロズヌイに突入したが、死者1000人以上の大損害を被って撃退された。ロシア軍は猛烈な砲撃、爆撃を首都に加え、95年3月に同市を制圧したが、ゲリラ戦は96年まで続いた。

停戦後、穏健派のマスハドフが大統領となり、ロシアはチェチェンに最大限の自治を認め、復興資金を注ぎ込んでロシア連邦内にとどめようとしたのだが、マスハドフ大統領らは独立を求める姿勢を強め、99年9月ロシア軍は再び爆撃・侵攻を開始した。

2000年2月再びグロズヌイを占領しマハドフらを追放、親露派のカドイロフを大統領にすえたが、これ以降テロは激化、拡大し、カドイロフも今年5月爆殺された。》

ロシアの極右政党「祖国」のロゴジン代表によって、「カフカスのバルカン化」という言葉がもちだされたが、北オセチアでの学校占拠事件に対する報復攻撃などから、ロシア南部・カフカス地方を舞台に大カフカス戦争が発生するかもしれないという最悪のシナリオの可能性を、その言葉は示唆していたが、学校占拠事件を起こした武装勢力の中に6月のイングーシ共和国の省庁襲撃を起こしたイングーシ人の部隊も加わっていたことが報道されていたことからすれば、「カフカスのバルカン化」の予兆もけっして考えられないわけではない。時事通信外信部の奥山昌志は『世界週報』（04・9・28）で、この「カフカスのバルカン化」という最悪のシナリオについて、こう説明している。

なぜ、北オセチアの学校が狙われることになったのか。「事件は、カフカス地方の脆弱な宗教・民族的バランスを覆す恐れがある」と、プーチン大統領は非難したが、事件はまさにその「恐れ」にむかって惹き起こされたとみなされ、《事件の舞台となった北オセチアは、カフカス地方で唯一のキリスト教国で、イスラム教主体のチェチェン、イングーシ、ダゲスタンといったほかの共和国の中にあって異色の存在》で、親露的であった。

《18～19世紀のロシア帝国とカフカス山岳諸民族との戦争では、ロシア軍の進出拠点となった歴史的経緯があり、第二次大戦末期の1944年にスターリンが行ったチェチェン人、イングーシ人の中央アジアへの強制移住の際には、オセチア人がイングーシの領土の一部、プリゴロドヌイ地区を併合。旧ソ連崩壊直後の92年には北オセチア・イングーシ間で武力衝突が発生するなど、対立がくすぶってきた。

また、北オセチアのモズドクにはロシア軍基地や軍病院があり、チェチェン独立派掃討戦へのロシア軍の出撃拠点となっている。このため、過去にもしばしばチェチェン独立派による自爆テロの標的になってきた。》

更に、《グルジアからの分離とロシアへの編入を求めている南オセチア自治州では最近、グルジア軍とオセチア人武装勢力の戦闘が激しさを増しており、ロシア政治環境センターのコンスタンチン・シモノフ所長は「オセチア人に対する共通の戦線が形成される可能性がある。そうなった場合、紛争はロシアの国境を越えるだろう」と述べ、ロシア・グルジア間の紛争に発展する可能性を指摘している。》船橋洋一の連載時評（『週刊朝日』04.9.24）によれば、《プーチンが今日あるのは、チェチェンに対する強硬姿勢のおかげである。1999年夏、1200人のチェチェン武装勢力がダゲスタンへの攻撃を開始した。チェチェン紛争がカフカス一帯へと広がっていく。翌々日、エリツィンは、ステパシン首相を解任、プーチンを後任に据えた。》独立を目指すチェチェン人武装勢力によるダゲスタン共和国へのこの攻撃は、ロシア連邦での一連のテロを加えて、第二次チェチェン紛争と呼ばれるが、「カフカスのバルカン化」はチェチェン紛争の東隣のダゲスタンへの波及というかたちをとって、起こりうることも考えられる。

実際、プーチン大統領は「ダゲスタンに対する山賊たちの攻撃をやめさせることができなければ、ロシアは存在することをやめる。これは、国家の崩壊を防ぐことができるかどうかという瀬戸際の問題なのだ」「チェチェンの山賊が居残れば、ダゲスタンをのみ込むだろう。それは終わりの始まりとなるだろう」と語っているが、ロシアにとっての最悪の事態はチェチェンとダゲスタンが互いの攻撃を止めて、戦闘的イスラムの旗のもとに結合することなのだ。《ダゲスタンは、ロシアのカスピ海沿岸戦の70%を占めている。加えて、ここには不凍港のマハチカラ港がある。アゼルバイジャンからの石油パイプラインも通っている。それを失うことはロシアにとって戦略的敗北なのである。》

したがってプーチンが、「もし、これ（チェチェンのダゲスタン浸透）を直ちに防がなければ、われわれはロシア連邦のすべての領土で、第二のユーゴスラビアが登場するのを、つまりロシアのユーゴスラビア化を見ることになるだろう」と予見するの、あ

ながち誇張とはけっしていけないのである。

《ロシアはまた、チェチェンが西隣のイングーシにも浸透しているを見て、神経をとがらせている。今回の学校占拠武装勢力のなかには何人かのイングーシ人も加わっていたとの情報が流れた。武装勢力は占拠後、小さな子供を連れた女性26人を釈放したが、それはイングーシの元大統領が仲介したのが功を奏したからだ。国際紛争予防を専門とするNGO（非政府組織）、ICG（国際危機グループ）の報告書によれば、北オセチアからイングーシに報復のためのオセチ人の武装グループが入ったとの情報があるという。ここ一帯、血には血で復讐する伝統が根強いという。ノ北オセチアのオセチ人（50万人）の間では、キリスト教（ロシア正教徒）が住民の7割を占める。ここは伝統的に親ロシア的である。ノテレビの画像は、イスラム狂信者集団が、キリスト教徒のオセチアの子供たちを虐殺したというイメージを投影している。》

ソ連崩壊を目の当たりにしてきた最高権力者のプーチンの、ロシアをソ連崩壊のような目に遭わせてはならないという断固たる決意が、チェチェン問題に対する非情なまでの容赦ない対応として貫かれているのが感じられるが、船橋氏はチェチェンに対するロシアの締め付けにも言及している。《ロシアはチェチェンを検疫ゾーンのように封鎖してきたため、この経済は壊滅の状態に追い込まれた。かつて、グロズヌイは北カフカスで最大の都市だった。30年代まではバクーに続いてロシア第2の石油都市だった。

若者の80%から90%は職がない。グロズヌイは無法地帯と化した。誘拐ビジネスがはびこり、マフィオクラシー（マフィア支配）が増殖した。98年、マスハドフ大統領は、イスラム過激派と誘拐ギャングの弾圧に乗り出した。》

経済的な荒廃だけではない。前述したように、チェチェンでのロシアの軍・治安当局による掃討作戦は、ちょうどイスラエルによるパレスチナに対する抑圧的な攻撃が女性の自爆テロを惹き起こしたように、女性自爆テロを生みだしている。ロシアの掃討作戦なるものがどのようなものであるのか、米原万里は先の「私の読書日記」の中で、「毎日、何十人ももの負傷者がアタギに運ばれてきた。外科医のわたしですら、これほど凄まじい身体内部の損傷は見たことがなかった。大腸や小腸をはじめ、肝臓や腎臓や生殖器がまるでひき肉のように潰されていた。どれもこれも殺傷性の高い破砕性爆弾によるものだった」と、文中に記されているチェチェン人医師ハッサン・バイエフの自伝『誓い』（アспект）を取り上げている記述から、その掃討作戦の一端が覗けるかもしれない。

《人間味溢れるしたたかな快男児で、自身幾度も命を危険にさらしながら、ロシア兵、チェチェン人の区別なく患者を救うために全力を傾ける。拉致拷問、虐殺などロシア軍による度重なる残虐行為にもかかわらず、チェチェン兵も女たちも負傷したロシア兵を憐れみ介護し、極秘裏にロシアへの帰還を助けているのがすごい。ロシアのテレビではチェチェン人がロシア人捕虜を虐待していると報道しているというのに。武力では劣っていても、人間として圧倒的に勝っている。

長老たちは、兵士が契約兵でない限り食物を与えることを許容している。「契約兵と

コントラクトニキ

は一定期間軍務につく契約に署名した^{スベツナス}特殊部隊の兵士、つまり傭兵であって、チェチェンで戦うために刑務所から釈放された犯罪者が多い」「彼ら傭兵には、人間性のかけらもなかった。彼らにとって、チェチェンは罪に問われることなく略奪や強姦を行なえる格好の場所だった。」

まともに訓練も受けず行き先さえ本人にも家族にも知らされずに派遣されてきたロシア兵は傭兵たちに虐待されていて、著者が彼らの脱走を助けるスリル満点な話も出てくる。》

ソルジェニーツィンの『廃墟のなかのロシア』(00年、草思社)でも、チェチェン戦争が言及されている。《1989年の人口調査では、チェチェンには70万のチェチェン人と50万の非チェチェン系の住民が住んでいた》が、当然その「非チェチェン系の住民」の中にはロシア人も含まれており、チェチェン戦争に触れる彼の記述は、チェチェンに居住していたロシア人がどのように取り扱われたのか、その運命も交えながら書きとめられている。「チェチェンの独立」に対する彼の見解は、次の個所に明らかだ。

《私は50年代にカザフスタンの流刑地でチェチェン人たちと一緒にだったので、彼らのことはよく知っている。彼らは屈することを知らぬ情熱的な性格の持ち主であり、抑圧には決して譲ることなく、武術の達人で、独立心が旺盛である。チェチェン戦争が始まったとき(1991)から、ロシアにとって、チェチェンとの軍事衝突はひどく困難な戦いとなるだろう、いや、それどころではあるまい、と私にはわかっていた。当時、政治問題、社会問題、民族問題が次々に噴出したため、ロシアは苛立ち、動揺していたから、チェチェンを政治的交渉によって鎮めることは絶望的に見えた。賢明な解決策としては、チェチェンの独立を、間髪を入れず承認することであり、チェチェンをロシア本体から切り離して独立国家というものを味わせてやり、だがやはり間髪を入れずに、しっかりした国境警備隊を編制し、早急に国境を仕切ることであった。》

この彼の提言はエリツィンにも、ロシアのメディアにも無視され、《独立を宣言したチェチェンに対して、ロシアが何もしていないうちに三年の歳月が過ぎていった。》

《一方、チェチェンでは非チェチェン系の住民(もちろん主にロシア人である)に対するテロが燎原の火のように広がっていった。チェチェン人たちはやりたい放題に、ロシア人を侮辱し、虐げ、盗み、財産、住居、土地を取り上げ、殺し、窓から放り投げ、女だけでなく男にも暴行を加えて拉致し、子供を幼稚園から誘拐した。こうして多くのロシア人が跡形もなく姿を消した。「ロシア人はチェチェンから出ていけ!」チェチェンではロシア人たちの号泣が湧きあがり、ロシア人たちは不満を訴えるためにロシアの司法機関を訪れたが、ロシアの司法機関は三年ものあいだずっと彼らを見捨てた。行政も、司法も彼らを保護しようとしなかった。この50万人の非チェチェン系の住民の運命については、ロシアのマスコミ全体も沈黙しつづけた。いまや報道はすっかり自由になったというのに、三年間ずっと沈黙しとおしたのだ! しかも、ロシアのテレビ局は、悲惨な光景や死体をわれわれには見せなかった。三年間である。三年ものあいだ、

著名なロシアの「弁護士たち」はのんびりと時を過ごし、我が国の知識層の冷淡さをさらけ出した（三年間にモスクワの新聞で私が知った唯一のチェチェン情報というのは、チェチェンではドゥダーエフ体制下の最初の半年に、住民の三人に一人が暴行を受けた、というものであった。ここで言う住民とは、もちろん非チェチェン系である）。これはいまで言う民族浄化にほかならなかった。だが、ボスニアでの民族浄化は全世界の知るところとなったのに、チェチェンでの民族浄化は誰にも知られなかった。国連にも欧州安保協力機構にも、欧州評議会にも。》

誤解の余地はないと思われるが、北オセチアの学校占拠事件を惹き起こして、多数の子供たちを撃ち殺したチェチェンの武装勢力の非道冷酷さを思い浮かべるなら、野蛮な彼らがいかにやりかねない蛮行であるということを強調するために、ソルジェニーツインのこの個所を取り出したのではない。数百年間にわたるロシアの侵略、抑圧を受けつづけてきたチェチェン人のロシアに対する歴史的な怨念が、チェチェン内の弱者たるロシア人に向けられていく悲劇の循環をそこにみているのであり、更に、チェチェン戦争を知るためには、チェチェン人が強大なロシアからされてきたことだけではなく、弱小のチェチェンがロシア人に行っていることもみなしなければならないだろう。ソウルジェニーツインが憤り憂えているのは、チェチェン人のロシア人に対する非道な仕打ちではなく、何も手を打とうとしないロシア政府の無気力、無能であり、彼らの怠慢によってロシアの未来が確実に閉ざされていこうとしていることなのだ。

《チェチェン戦争でロシア政府がとった犯罪的な行為は、数えきれないほどたくさんある（そして、その代償として罪のない人々が犠牲となった）。だが、特筆すべき、不可解な措置は、1995年6月に、バサーエフがブジョンノフスクにテロ攻撃をかけたあとに、ロシア政府が、バサーエフ一味を取り逃がしただけではなく、チェチェン人に、ほとんどすべての領土をさっさと自分から進んで返還したことである。それはチェチェン人が半年のあいだに侵略した領土であった。こうして再び振り出しに戻った。

こういった汚い軍事行動を行っているあいだじゅう、ロシアの首脳部だけでなくロシアの世論の多くが、「ロシアの統一を守るため」には戦争もやむをえないと認めていた。さもなくば「カフカス全土が失われる」か、「ロシア全土が崩壊する」かのどちらかであると。彼らは紛争の性質を見極めることなく、衝動的に判断を下した。チェチェン戦争の進行と合わせて、我が国の政権はほかにも多くの愚行によって、あるいは手をこまねいていることで、ロシアを取り返しのつかない方向に導いていった。黒海もクリミアも譲渡してしまったのだから、なぜチェチェンを引き止めようというのか.....。

チェチェンを切り離すことで、病に冒された体の一部を取り除いて健康になり、ロシアを強化することができただろうに。屈辱的な軍事的失敗が続いたため、ロシアは世界じゅうに軽蔑されることになった。これこそロシア全体を崩壊に向かわせる最も確実な方法であった。》

チェチェン戦争でロシア政府が休戦を急ぐかたちで、《屈服してから以後は、ロシア

政権も、我が国の世論もチェチェンのロシア人のことはすっかり忘れてしまった。チェチェンに残された4万人ほどのロシア人たちは、餓死か大虐殺を待つしかなくなったのである。絶望的な手紙が届く。「ロシアはわれわれのことを忘れてしまった。脱出するのを手伝ってくれ！ 戦争では生き残った者が今度は家族ごと殺され、死者がどこに運ばれているのかもわからない。ロシア人には年金が支払われない。年金は『町の復興のために使われている』からである」。そして、望ましい平和を得ようと条約に調印したチェチェンでは、いまでもロシア人奴隷が存在し、売り買いされてお^り、チェチェン政権はこれを止めようとしていない。このことにわれわれは耳を塞^{ふさ}ごうとしているのだ。

しかし、これでもまだすべてではない。チェチェンから逃げ出すことのできた20万から30万人のロシア人は、全財産を失い、赤貧状態にある。彼らはロシア連邦の移住局から細々とした援助を受けて暮らしていた。ところが戦争が終わったいまでは、ロシア政府は彼らを厄介な重荷としか見ていない。1997年のはじめから手当が打ち切れ、避難者のための「臨時居住地」に住む権利も奪われた。そして、もとのチェチェンに戻ったらどうかと言われている。

これでもようやく終わりなのか。いや、まだ終わっていない。ロシアが何百万人という同胞を継^ま子扱いして拒否して以来、收拾がつかないほどさまざまな事態が生じている。》

ソルジェニーツィンがチェチェン戦争について書くのも、チェチェンでのロシア人の悲劇的な運命について言及するのも、すべて94年12月に勃発した第一次チェチェン戦争以降、プーチン政権がやがてその三ヵ月後に登場することになる、99年10月の第二次チェチェン戦争以前のことである。プーチン政権の登場によって（第二次）チェチェン戦争は先の見えない、本格的な泥沼状態に入ったとみられている。「チェチェン独立派とロシア政府『テロと報復』の年表」(『S A P I O』04.9.22)には、96年8月の「チェチェン独立派のマスハドフ参謀総長とロシアのレベジ安全保障会議書記の間で停戦合意」以降の経過が、こう記されている。

97年1月 マスハドフがチェチェン大統領に選出。

99年9月 8日と13日にモスクワで相次いで集合住宅を狙った爆破テロが発生。合わせて213人死亡。エリツィン大統領は全国的な「対テロリズム作戦」開始を宣言

23日、ロシア軍機がチェチェンの首都グロズヌイを空爆。第2次チェチェン戦争始まる。翌10月、チェチェン全土に戒厳令

12月 エリツィン大統領が辞任。チェチェン戦争で指導力を見せたプーチン首相が大統領代行に就任

00年7月 チェチェン各都市で武装勢力の自爆攻撃が連続。ロシア兵ら42人が死亡

8月 モスクワ中央部で爆弾テロ。12人死亡

01年4月 トルコ・イスタンブールでチェチェン侵攻に抗議する武装グループがホテルを占拠。120人が人質となるが、12時間後に全員解放

- 9月 グロズヌイのロシア政府庁舎で爆破テロ。1名死亡
- 02年2月 チェチェン武装勢力がグロズヌイから撤退
- 4月 プーチン大統領、チェチェン掃討完了を宣言
- 8月 ロシア軍ヘリコプターをチェチェン武装勢力が撃墜、ロシア兵118人が死亡
- 10月 23日、モスクワ劇場占拠事件発生。観客数百人を人質に立てこもる。26日にロシア特殊部隊が強行突入するも129人が死亡
- 12月 グロズヌイのロシア政府庁舎で爆破テロ。死者83人
- 03年3月 ロシア軍の監視下でチェチェン住民投票実施。チェチェンをロシアの一部とする共和国憲法が承認される。
- 5月 チェチェン各地で独立派によるテロが連続発生。死者80人以上
- 7月 モスクワ郊外で開催されたコンサート会場で爆弾テロ。15人が死亡
- 8月 北オセチア共和国の軍病院で自爆テロ。約50人が死亡
- 10月 ロシアに管理された大統領選挙で親ロシア派のカディロフ大統領が誕生
- 12月 ロシア南部のスタプロポリで列車爆破テロ。約50人が死亡
- 04年2月 モスクワの地下鉄2号線で爆弾テロ。約50人が死亡
- 5月 グロズヌイで開催された対ドイツ戦勝記念日式典で爆弾テロ。カディロフ大統領が死亡
- 6月 チェチェンに隣接するイングーシ、ダゲスタン両共和国の政府庁舎をチェチェン武装勢力が襲撃。57人以上が死亡

これ以降、8月24日夜モスクワのバス停爆発。数時間後に二機の旅客機が自爆テロで墜落。90人が死亡。8月31日、モスクワの地下鉄駅前で自爆テロ。10人が死亡。9月1日、北オセチア学校占拠事件へと続くが、先の「年表」は客観的にみて、チェチェン独立派による爆破テロや自爆テロばかりが記述され、ロシア政府のチェチェン攻撃や報復は省略されているので、ほとんど聞こえてこないチェチェンのかすかな声にも深く耳を傾ける（機会をもつ）必要があるだろう。ドキュメンタリー・ビデオ『子どもの物語にあらす』を製作して、《チェチェンの子どもたちの声を通して 世界にチェチェン紛争の現実を伝えようとする》、チェチェン人ジャーナリストのザーラ・イマーエワが03年秋、アムネスティ日本の招きで来日し、全国17か所でスピーキング・ツアーを行っているの、その講演記録（『世界』04・2）の中に踏み入ってみる。

ロシア連邦最南端に位置するチェチェン共和国は、南北170^{km}、東西100^{km}あまり、面積1万4300平方^{km}の岩手県ほどの広さで、ロシア国土の1200分の1にすぎず、89年の国勢調査では全ソ連の総人口2億4千万人のうち、チェチェン人の人口は100万であった。しかし、10年も続くロシア軍による殲滅作戦にもかかわらず、人口は120万人に増大しているという、《このようなロシアの不確かな公的統計数値を信じるとしても、わが民族は、人口1億7000万という、100倍以上の人口を持

つ国、ロシアと戦っていることになります。不均衡な状況は、人口面だけではありません。戦争は我が国土が完全な占領下にあるという状況のうちに続いています。チェチェン抵抗運動の戦士たちは、事実、大砲といった重火器、飛行機、そしてあらゆる意味での装甲車両などを全く持っていないのです。》

ソルジェニーツィンは、チェチェン人がチェチェン内の50万人の非チェチェン系の住民に対して行ったテロについて、「民族浄化」という言葉で形容しようとしていたが、ザーラも《今日、チェチェンで起きている出来事》を、「ジェノサイド」と定義づける。《もちろんロシアのプロパガンダは、このチェチェン民族に対する計画的な民族殲滅作戦を、身勝手な術語で言い換えてきました。たとえば、「反乱者」は「分離主義者」、それが「武装分子」、「破壊工作分子」と呼ばれ、最終的には「国際テロリスト集団」とされました。さらに付け加えるならば、100年、200年前のカフカスでの帝政ロシアの将軍や総督たちは、私たちを「野獣」「強盗団」「野蛮人」と呼んでいました。

(中略)ロシアの領土拡張に対する私たちの抵抗の歴史は、現代から遡ること数世紀、16世紀後半から始まっています。日本では江戸時代の前夜に当たります。この頃からチェチェンの戦争と武装蜂起が始まり、4世紀の間ずっと、わずかな小休止を伴いながら、続いて来ているのです。

チェチェン民族に対する苛酷な「ジェノサイド」と「人種差別」は、カフカスのほかの山岳民族にも向けられましたが、これはロシア帝国の、自己内部の多くの諸民族を忌み嫌う政策に基づいて、日常茶飯に行なわれていたのです。1865年には2万3000人以上のチェチェン人が、トルコに追放されました。これは当時のチェチェン全人口15万人の16%に当たります。その13年後、1878年には、5000人、全人口18万人のおよそ3%がシベリア送りになりました。さらに27年後の1905年、全人口24万人の1・5%に当たる3000人が、小アジアに追放されました。さらに1918年から19年の流血の独立戦争では、人口27万人のうち、1万人以上、つまり4%以上が非業の最期を遂げました。1944年の全民族40万人の丸ごと強制移住では、一般市民の大量殺害と、抵抗した村を住人ごと焼き討ちした事実が広く知られています。》

チェチェン戦争とは結局のところ、領土拡張政策に基づくロシアの侵略に対するチェチェン人の抵抗闘争に尽きる。要するに、ロシア連邦内の他の共和国はロシアに屈服したり、懐柔されてきたのに対し、チェチェン人は4世紀にわたって抵抗しつづけてきている誇り高き民族といえよう。圧倒的な軍事的劣位の下で攻撃され、殺され、自爆テロで報復していく繰り返しの中で、北オセチア学校占拠事件が発生しているのである。ソルジェニーツィンが提言するように、ロシアがチェチェンの独立を認めさえすれば、チェチェン戦争に終止符を打つことができるだろうが、「カフカスのバルカン化」を恐れるロシアがチェチェンの独立を認めずに、強硬姿勢をとりつづけるかぎり、学校占拠事件に匹敵する大惨事が繰り返されることは、火を見るよりも明らかであろう。

2004年10月31日記